エリクソンと幼児教育 (5)

仁科弥生

三、移動と性器期（その一）

三歳も終りのころになると、子どもの歩行はますます自由になり、また力強いものになって、第三の発達段階へと進む。すなわち、子どもは親に依存しないで活発に動きまわるようになる。多少のつまずきや不安を経験しながらも、ありあまるエネルギーを思いのままに駆使してそれらを乗り越えていく。その溢れるエネルギーは彼に失敗をすぐに忘れさせ、また好ましいと思われるものへ向って、たとえそれが不確実のことであっても、或は危険なものに見えたとしても、ひるむことなく接近するよう彼をかりたてるのである。また周囲の人々に強い関心をもち、比較をするようになり、何事についても大きさの違いに目を向け、とりわけ性差について疲れをしらぬ好奇心を示すようになる。そしてやがて身につけなければならない未来の役割について理解しはじめる。或は少なくともどんな役割が模倣に値するか実利的に理解しはじめるのである。このような幼児期後期の発達段階をエリクソンは「移動と性器期」と名づけている。

この段階の子どもの行動の多くを支配している様式は「侵入的」であるという。たとえば、子どもはその攻撃的なおしゃべり

で他人の耳や心の中に押し入っていく。或は活発な移動でたえず空間を侵す。燃えるような好奇心で未知の世界に踏み込んでいく。そして、男女両性の相違を強く意識するようになるのである。エリクソンは、ここで幼児性器期の舞台、「侵入と包含」の行動様式の最初の舞台がととのうと考えている。幼児性器性欲は、いうまでもなく未熟な性的発達の状態にとどまる。それは、特別なフラストレーションや特殊な刺激によって早熟的にあらわれる場合は別として、普通は単に何か魅惑を感じさせられる経験という程度にとどまり、それ以上に発展することは稀である。その場合、男の子の性的関心は男根的であり、それは男女両性の性器に集中的に向けられる。それとともに、漠然とした性の衝動を感じはじめるのである。フロイトは、この段階の男の子は最初の性器的な愛着を母親的な大人、つまり自分の世話をしてくれる人物である女性に向け、この母親的な人物を性的に独占する人物に対して最初の性的な競争心を発達させると想定し、そのとき男の子が経験する葛藤をエディプス・コンプレックスと名づけた。女の子の場合は、父親や他の重要な意味をもつ男性に愛着を向け、自分の母親に嫉妬するようになる。それはさらに女の子に大きな不安をも引き起こすという。なぜなら、彼女は一方では自分の世話をしてくれる母親を無意識的に大事に思っているため、一層、母親の存在は魔術性をおびた大きな危険に感じられるからである。近親相姦をタブーとする社会では、事態はさらに複雑である。子どもは、移動の自由が増大し、今や自分は両親と同じくらいに一人前であるという子どもらしい自負心をもつようになるが、性器の領域ではまったく劣っているという明白な事実にきびしい挫折を経験する。そればかりではない。男の子は母親に対する性的関係において、けっして父親に代わることはできないという事実にがい敗北感を味わうことになる。エリクソンは、こうしてもたらされる深刻な衝撃とそれに伴う魔術的な恐怖が、フロイトのいうエディプス・コンプレックスの概念の背景にあると考えている。そして、エリクソンは、女の子の場合は、この段階で宿命的な経験をするという。すなわち、女の子の移動的、心理社会的侵入性は男の子と同じように増大するが、同時に彼女は男女の性器の違いを決定的なものとして理解することになる。男の子の場合、目に見える器官があって、それに大人になる夢を結びつけることができる。しかし女の子の場合には、性的に男子と同等であるという夢を託すことのできるそれはない。彼女の胸もまだ未来を示すしるしとしての乳房をもっていないからである。そして、やがて女の子は、幼いものの世話をするなど女性的摂取と母性的包含という基本的行動様式を発達させるとともに、強要的になったり、

握り屋的になったり、或は過度に依存する幼稚性を示したりするようになるという。この「摂取」と「包含」の様式は、口唇と感覚の段階で発達した「取り入れ」様式への部分的な逆行のようにみえる。この点について、エリクソンは、女性の性器の様式が口唇の様式に近似している事実を指摘し、身体の解剖学的構造と心理との間に対応関係のあることを示唆している。さらに彼は、この段階ですでに見られる性差は、男子がより活発な筋肉的生活に進む可能性をもつことに対して、女子はより豊かな感覚的弁別力をもつ可能性や、未来の母親としての繊細な感覚や受容的な特性をもっていることを暗示するものと解している。これらの見解は、男女の心理学的性差があらわれてくる過程を説明するものとして大変説得力のあるものと思われるが、性差の発達過程に関するエリクソンの考え方については回を改めて取り上げたいと思う。

次に、この段階では、男女両性の基本的な社会的行動様式に、「獲得するチャンスを逃さない」("being on the make") という意味の「ものにする」("making") という様式が加わると考えられている。「ものにする」というこの言葉には、正面攻撃、競争の楽しみ、目標達成への執念、征服の喜びなどが含まれている。男の子の場合には、正面攻撃によって相手をものにするというように、男根—侵入的様式によって「ものにする」傾向が強調されつづける。女の子の場合には、もっとおだやかな形で、たとえば自分を人目につくようにしたり、可愛いい女に見せたりして、相手を誘惑し、ものにしていく傾向に変わっていく。このようにして、子どもは目標を選択し、これらの目標に近づくために忍耐するということを学んでいく。これが自発性の必要条件であるという。

さて、この発達段階の課題として、エリクソンは自発性対罪悪感をあげている。歩けるようになった子どもは、前段階で自律性対恥・疑惑という発達課題を肯定的な形で解決すると、自分について肯定的な感覚を強めてこの段階へと進んでくる。子どもは強い好奇心を外的環境の探索に向ける。前段階で自分の中に見いだしたような安定性や規則性を外界にも見いだそうとしているのである。その好奇心は物理的なものから形而上学的なものにまで広がっていく。環境に対するこの積極的探索をエリクソンは自発性と呼んでいる。ニューマンらは、先の自律性が環境に対する積極的な身体的探索であったとすれば、自発性は世界に対する積極的な概念的探求であると位置づけている。この場合注目すべきことは、環境を探索する際の動機や能力が自律性という強い感覚の発達に依存しているということである。子どもは自分自身を統制す

る能力に自信をもったとき、はじめて積極的にさまざまな活動に取り組むことができるのである。さらにこの幼児期の好奇心や探索欲求が、青年期においていかに生きるべきかという人生の目標についての思索へと発展するための基礎となるということである。

この段階における危険は、子どもが新しく獲得した運動能力と知的能力とを心ゆくまで楽しもうとするときに、自分の計画した目標や実行した行為に関して罪悪感を抱くことであると考えられている。すなわち、彼の積極的な活動は、やがて彼の身体や精神の実行力をはるかに越えるようになり、その結果、自分が意図した自発性に自ら強力な停止を命じることを余儀なくされるからである。また、どの文化でも、子どもの探索欲求の充足に対して何らかの制限を設けている。ある種の質問は許されないとか、ある種の行動はしてはいけないなどである。たとえば、子どもが自分の身体や友だちの身体に興味をもって詮索をすることは探索欲求の一つのあらわれである。ところが、とくに性器についての好奇心などに対しては大人が当惑を感じたら、不快感を示したりするので、子どもは何を悪いことをしたと罪意識をもってしまうのである。そして、子どもは、親の当惑や不快感を避けるために、ある領域の詮索を抑圧しなければならないことを学ぶ。実はこのようにして、子どもはさまざまな文化的禁止を徐々に理解し、タブーになっている事柄に対する好奇心を抑えることを学んでいく。またタブー領域の侵犯が起こりそうになると、ちょうど警告を与えるように罪悪感が頭をもたげ、子どもの行動を制約するのである。先にも触れたが、多くの文化が共有しているタブーの一つに近親相姦の禁止がある。したがって、エディプス期にある幼児は、生物学的にいっても性的に不完全であるために、彼のエディプス的願望は攻撃的な空想となり、その結果、子どもは深い罪悪感におそわれるのである。また、性器の興奮と結びついた空想に対する罰として性器を失うことへの不安（女の子の場合は、自分はすでに失ってしまったのだという確信）を抱く。精神分析理論は、ここですべてが結合して、人間特有の危機を招来すると仮定する。そしてその危機の中で、同性の親との同一化という過程をへて超自我が形成され、親の価値観や道徳的規範が子どものパーソナリティの中にとり入れられ、やがて子どもは親に対する前性器期的な愛着から卒業すると考えられている。自発性と罪悪感という課題の解決にあたって重要な役割を果たす同一化の過程と道徳性の発達については次回でくわしく触れてみたい。

さらに、エリクソンによれば、自発性対罪悪感という心理社会的危機の肯定的解決は、環境に対する積極的な認知的探索がいろ

いろな情報をもたらしてくれる楽しい経験であるという感覚を子どもに発達させるという。いうまでもなく、この探索欲求の発達の線上に子どもの知的教育は考えられなければならない。子どもが知りたい、やってみたいと思う自発的な興味に即さない限り、文字や数の学習の効果もあげることはむつかしいのである。そしてこの危機が否定的に解決されると、子どもの心に強い罪悪感の感覚がつくり上げられるという。たとえば、子どもの質問や探索に対して親がきびしい態度でそれらを制限すると、子どもは自分の周囲の世界に対する疑問や好奇心をすべて両親への侵犯であると感じさせられてしまう。子どもの質問は、部分的な真実、不適切な説明、無関心などであしらわれることもある。その結果、好奇心そのものがタブーであると思わされ、何かに興味をもつこと自体が罪であるとさえ感じるようになる。このように、危機を否定的に解決した子どもは、自分の内的な能力や想像力や感覚能力に応じた行動を自らすすんでとることができず、両親やその他の者に全面的に依存するようになるという。ちなみに、母親の態度と子どもの知的発達について三歳八ヶ月から小学校入学直前の六歳までの幼児を対象にして日米比較調査を行なった東、柏木の研究の中に、これらの関係についての実証的報告があるので、その一部分をここで紹介しておこう。まず、面接によって母親の教育観、しつけ態度と子どもの知的発達を調査した結果をみると、就学前に文字や数を教えることが重要だとする意見は子どもの知的発達にマイナスの関係をもつことが報告されている。これに対して就学前に社会性や言葉の意味や話し方を身につけることを重視する意見が知的発達と日米ともほぼプラスの相関の傾向にあったことが明らかにされている。このように、文字や数といった学校での課業に直結する技術を就学前に覚えることを重視する親の態度が子どもの知的発達とむしろマイナスに結びついているということは、文字や数といった技術の習得以前に、自発的な探索や遊び、友だちとの協力などの経験を通しての子どもの全般的な認知的、社会的発達が大切であり、それが前提となって知的発達はすすめられることを実証していると思われる。また、自由遊び場面における母親の子どもに対する働きかけと子どもの行動特徴との関連を調査した結果には、子どもの自発的な関心や活動を重んじ、母親はそれを側面から激励、援助するという間接的働きかけの指標である「配慮」「賞賛」は「独創性」「活動性」「持続性」といった望ましい行動特徴とはプラス、「衝動性」「依存性」といった望ましくない特徴とはマイナスの相関が見いだされている。他方、母親主導の直接的働きかけの指標である「構造化」「圧力」「おしつけ」「統制」は「衝動性」「依存性」とはプラス、「独創性」

「活動性」とはマイナスに相関している。そしてこのパターンは日米間で基本的にほぼ等しいと報告されている。このことは、母親が自由遊び場面で、子どもの活動に深く関与し、統制し圧力をかけてリードして行こうとするほど、子どもは母親に依存的になり独創的、自発的に活動する欲求は抑えられてしまうことを示唆している。そして子どもの自発的な関心や活動を見守り、はげますような母親の態度が子どもの探索欲求を強化し、子どもの活動を活発にさせ、持続性のある独創的な活動を促進することがうかがわれるのである。さらに、日米の母親の教育観、しつけ観について、質問紙法によってえた回答の中で、自発性、内発的動機づけ、自尊などを重視する意見を示す選択肢の回答には日米差はみられなかったと報告されている。大変喜ばしいことであると思うと同時に、回答傾向が全般に日米きわめて類似していたという結果に、日本の幼児教育が欧米の教育思想に大きく影響されている事実に今さらながら驚かされるのである。

話をエリクソンの理論にもどそう。彼はこの発達段階の徳目として「目的性」をあげている。人が「意志」の芽を時間をかけて育てなければならないのと同様に、子どもには、仮の方向づけをしたり、欲しいものに注意や活動を集中させたり、或は意味のない空想にふけったりして、「目的性」の萌芽と戯れることが必要であるという。子どもとって遊びとは、大人の思考や計画と同じように、試行の世界である。そこではさまざまな条件が単純化され、いろいろな方法が試みられる。子どもはたびたび姿を変え、主題を繰り返し演じる中で、あるときは過去の失敗を吟味し、あるときは期待を確かめることができる。また未来を予想し、やがて自分の計画をもちはじめる。或はやらねばならないいろいろな役割や来るべき現実の目的を学びとるのである。幼児期の遊びは、いわば中間的現実を子どもに提供しているのである。この遊びがもっとも盛んになる時期が、幼児期性欲が、人間にとって最大の障壁である「近親相姦のタブー」に遭遇する時期であるということは重要であるという。なぜなら、子どもの性的衝動と目的的なエネルギーは、はじめは感覚的喜びやさまざまな性的空想などをはぐくんでくれた両親に向けられるが、やがて遊びを通して現実的な目的物へと向けられていくからである。この場合、親は、どこで遊びが終り、繰り返しのきかない一回限りの目的性がどこで始まるかを子どもに示さなければならない。また、空想がもはやそれほど自由には許されず、学びとるべき現実が一層強く迫っていることを教えなければならないという。これらの両親の声とイメージが子どもの心に内在化され、やがて許される行為や思いを明確に示す一貫した内なる声として子どもの活発な良心の

発達に影響を与えることになるからである。そしてこの良心の発達によって、子どもは何が遊びで、何が空想であり、何が二度と繰り返すことのできないことであるかを識別していく。さらに重要なことは、家族的目的追求や経済的目的追求という目標のもとに目的的に統合されている家族を一つの倫理的な例証として子どもが良心の中に取り入れていくということである。そこで「目的性」とは、子どもが空想の挫折や罪悪感や或は罰を受けるかもしれないという不安にも打ちかって、価値ある目的を心に描き、実際にそれを追求する勇気であるとエリクソンは定義している。そしてそれは家族を手本として生まれ、またすべての行為の原型となるという。したがって、幼児といえども家族の一員として能力にみあった役割を分担し、責任を果たすという経験は大切な意味をもつのである。しかし、遊び戯れる子どもとして出発した人間は、たとえ最高の目的に生きていると感じているときでも、その行為の中に遊び的、役割的な名残りをとどめているという指摘もなされている。われわれはそこにエリクソンの鋭い洞察を読みとることができる。

子どもの発達を眺めてみるとき、この時期ほど、学ぶことに積極的で、かつ学習が急速に進む時期はない。それは、発達における自発的な側面を一貫して強調するピアジェの理論によっても指摘されている。また、義務やその履行を分担しあうという点でも、もっとも成長する時期でもある。それだけに、彼らはものを仲間と共同で作ることに熱心であり、またそれができる。遊びを構成したり、計画したりする目的で他の子どもたちと協力することを好み、またそれが可能である。幼稚園や保育園では教師たちから喜んで学ぼうとし、理想の手本をすすんで模倣する努力をする。そして、幼児期の葛藤やエディプス的な罪悪感をあまり経験せずに自発性が行使できる機会を大人の仕事との同一化を通して求めようとする。その上、エディプス的段階は、許されることの範囲を限定する道徳観を子どもの心の中に重苦しいまでに確立させるだけではない。その秘められた罪悪感は、同時に、自発性や強い好奇心を、望ましい理想や現実的な当面の目標に向かわせるのに役立つのである。それは、また可能なことや実体的なものへ目を向けさせ、事実について学ぶ知識の世界へ子どもを導く。また、他人を「利用し、ものにする」のではなくて、ものを作る方向へと子どもを向かわせ、幼児期の夢が現実的な大人の生活目標に結びつくことを可能にするのである。したがって、この段階の後期には、子どもは、興味の方向がはっきりしてきて、ものを作る意欲に燃えて知識や技術を熱心に学びとろうとするようになる。

こうして、幼児期後期の子どもは、自発性対罪悪感という発達課題を解決すると、目的性という徳目に支えられて、次の発達段階へと進んでいく。その学童期をエリクソンは、子どもが正面から人をおそって「ものにする」要求を昇華させて、いろいろなものを生産することによって周囲の人々の承認を獲得することを学ぶ時期であるととらえている。そしてこの時期にすべての文化は生活技術を子どもに習得させようとする。子どもたちは何らかの形で組織的な教育を受けるようになる。エリクソンは、必ずしも専門の教師を中心とする学校だけでそれを受けるとは限らないと言っている。学校とは無関係の周囲の大人から、そしておそらくもっとも多くのことを年上の兄姉や仲間から子どもは学ぶという。また周囲の大人や兄弟が使ういろいろな道具を子どもが上手に扱うことができるようになる過程で生活技術を、そして文化の生産技術の基本を学ぶという。また、子どもはこれらの技術の習得や仕事にすすんで身を入れるようになり、「勤勉」の感覚を発達させると考えられている。エリクソンのこれらの記述は、それらがかってのわれわれの家庭生活の描写と近似していることをわれわれに気づかせる。今日の日本ではこのような家庭の役割がおろそかにされているというのが現状のように思われる。子どもはのびのびと遊ぶこともなく、かといって家事を手伝うことも少ないといわれる。子どもの仕事といえば机の前で勉強することだけで、しかも勉強がすべてに優先するという一部の風潮に対して反省をせまる声も聞かれる。教育のあるべき姿とは何であるかを問い直すわれわれの今日的課題の解決のために、エリクソンの理論は格好の手がかりを与えてくれるのではないだろうか。

（津田塾大学）

参考文献

1 Erikson, E. H., *Childhood and Society*. New York: W. W. Norton, 1963, 1st ed., 1950.（仁科弥生訳『幼児期と社会』みすず書房　一九七七）

2 Erikson, E. H., "Identity and the Life Cycle: Selected Papers," *Psychol. Issues* (Monogr.), Vol. 1, No. 1, 1959. New York: International Universities Press.（小此木啓吾訳編『自我同一性』誠信書房　一九七二）

3 Erikson, E. H., *Insight and Responsibility*. New York: W. W. Norton, 1964.（鑪幹八郎訳『洞察と責任』誠信書房　一九七一）

4 Evans, R.I.『エリクソンとの対話』岡堂・中園訳　北望社　一九七一

5 藤永保編『児童心理学』有斐閣　一九七三

6 Newman, B. M., and Newman, P. R.,『生涯発達心理学』福富・伊藤訳　川島書店　一九八〇

7 東・柏木・ヘス『母親の態度・行動と子どもの知的発達—日米比較研究』東京大学出版会　一九八一

8 Piaget, J.,『思考の心理学』滝沢武久訳　みすず書房　一九六八